

3
章

家庭でも「漢字」で子どもが驚くほど伸びる！！

漢字カード、漢字ゲーム、漢字かな交じり絵本……

家庭など身近なところではじめられる

●まずは、身のまわりのもの名前を漢字にしてみる

ここまでお読みいただいた方には、幼児期から楽しみながら漢字を学ぶことが、お子さんの知能の発達、そして内面的な成長にも素晴らしい効果をもたらすことは、十分にご理解いただけたことと思います。

ただ、いざお子さんにも漢字を、と考えると私も漢字にあまり強いほうではないし、とても子どもに教える自信なんてないわ」と、尻こみされる方も多いのではないのでしょうか。

そんな方でも、心配には及びません。石井式の漢字学習は、漢字カードや絵本を使って、あくまでも遊びとして楽しみながら進めていくものですから、先生役をつとめる方に、特別な知識や技術は必要ありません。

むしろ「漢字にはあまり自信はないけれど、ちょうどいい機会だから、私も子どもと一緒にやってみようかしら」くらいの楽な気持ちではじめられたほうが、結果として、お子さんの漢字に対する興味を、より自然な形で引き出すことにもつながるので、す。

では実際に、家庭でどんなふうに漢字学習をはじめたらよいかというと、まず、家の中にある電話、時計、机、椅子、花瓶、冷蔵庫、洗濯機、下駄箱といった、お子さんが日頃からよく目に見ているものに、たとえば電話には「電話」と漢字で書いた紙を作っておいて貼ってみるといいでしょう。

そして「あっ、電話が鳴ってるね、誰からかな」「時計は今何時かな」「冷蔵庫からジュースを出そうね」というように、会話の中で、できるだけその漢字を意識させるように指差しながら話してあげると、お子さんは「ああ、これはデンワって読むんだな」と

自然に覚えてしまいます。

ただ、ここで注意したいのは、家の中をいくら漢字でいっぱいにしても、最初に何度か読んであげただけで、あとは貼りっぱなしというのでは、壁のシミと同じで、あまり効果はないということです。

一度読めても、子どもの頭の中に言葉としてしっかり定着するには時間かかりますから、お母さんは面倒臭がらずに、できるだけ何度もくり返して読んであげるようにしてください。

●漢字カードを作ってみよう

漢字を書いた紙を貼れるものとなると、家具や電化製品など、どうしても限られてしまいます。そこで活用したいのが、手作りの漢字カードです。

手作りといっても、作り方はいたって簡単です。ご家庭にある紙を同じ大きさに切り、そこにマジックなどで漢字を書き込んでいけばいいのです。

カードをくり返し使うことを考えると、紙はボール紙のようなやや厚手のものがよいと思います。また、幼児はまだ視覚機能の発達が十分ではないので、カードのサイズはトランプより一回り大きめぐらいが適当でしょう。

漢字は見やすいように、太くはつきりと書いてあげてください。お母さんの中には、「私は字が下手だから」という方もいらっしゃるかもしれませんが、楷書かいしょで正しく書いてあれば、多少つたない字でも問題はありません、どうしても自信がないという方は、パソコンやワープロで印字したものを拡大してカードに貼ってもいいでしょう。

漢字カードに書く漢字は、お子さんにとって身近なもの、お子さんが興味・関心をもっているものならば、基本的に何でもかまいません。

たとえば「積み木」「砂場」「鉄棒」「公園」など遊びに関するもの、「帽子」「靴」など毎日身につけるもの、「牛乳」「蜜柑みかん」「大根」「ご飯」など日常食卓にのぼるもの、「目」「鼻」「口」「手」「足」など体の部位、「雲」「雨」「雪」など天気に関するもの、「お父さん」「お母さん」「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」といった家族の呼称など、カードにする漢字はいくらでもあります。

また、動物が好きな子だったら「猿」「象」「虎」「馬」「麒麟きりん」など、花の好きな子には「桜」「梅」「百合」「薔薇ばら」といった花の名前をカードに書いてあげるのもいいでしょう。

そして、できるだけ実物と一緒にカードを見せながら、

「さあ、靴を履いて、お出かけしようね」

「喉が乾いたから、牛乳を飲もうか」

「このお花は百合っていうのよ。とってもきれいなね」

というように、お母さんが漢字を読んであげればよいのです。実物がそばにない場合は、絵本や図鑑などを利用してよいと思います。

●画数より具体的な言葉かどうか重要

お母さん方の中には「最初に見せる漢字は、画数や字数の少ないものがわかりやすいのでは？」と気をまわす方もいらっしゃるかもしれませんが、これは無用の心配です。読むだけなら、むしろ画数が多く特徴のある漢字のほうが、記憶の手がかりも多く、覚えやすいものなのです。したがって、お子さんにとって具体的なイメージが浮かぶ言葉であれば、画数や字数は特別意識する必要はありませんし、当用漢字や小学校の配当漢字に入っていない漢字でも差し支えありません。

また「お母さん」「男の子」など、漢字かな交じりの言葉も、「これは漢字、これはひら



具体的な言葉から教えよう

がな」などと説明せずに、一つの言葉として与えてあげてください。そうすれば、改めてひらがなを教えなくても「お父さん」「女の子」など、同じような言葉が出てきたときに、「ああ、これは“おで、これは“さん”と読むんだな」というように、子どもが自分で類推して、ひらがなも自然に読めるように

なっていくのです。

それよりもむしろ注意が必要なのは最初からあまり抽象的な言葉を与えない、ということ。たとえば、私たち大人は「鳥」や「虫」といった言葉を何気なく使っていますが、現実世界には「鳥」という鳥も、「虫」という虫も存在していません。

それなのに、雀すずめを見ても鶏とりを見ても「鳥」、蟻ありも蜂はちも「虫」というように、大きさも形も異なるものを同じ名前呼んでしまうと、幼児はかえって混乱してしまうのです。

したがって、雀だったら「これは雀よ」、蟻だったら「これは蟻よ」と、まず具体的な名称で教えてあげてください。そうして、雀や鳩、鶴、鶏、家鴨など、個々の鳥を理解したうえで、その上位概念である「鳥」という言葉を与えてあげれば、翼とくちばしがある、全身が羽毛で覆われている、足が二本、といった共通項を通して、その意味が理解できるようになるのです。

●形の似た漢字は少し間隔をあけて与える

もう一つ覚えておいていただきたいのは「頭」と「顔」、「右」と「左」、「蟻」と「蝶」のように、字形のよく似た漢字は同時期に一緒に与えないほうがよい、ということです。

字形が似ている漢字というのは、共通の部首をもつ、したがって対やグループをなすものがほとんどですから、ついまとめて教えたくなるものです。ところが、たとえば「頭」という字を覚えてたの時期に、印象の似た「顔」という字を見せてしまうと、大抵の子どもは、両方とも「あたま」と読んでしまうのです。

そこで、最初に「頭」を覚えてたとしたら、まず何度もくり返し読み言葉としてしっかり定着してから、「顔」の字を与えてあげるようにしてください。体の部位をまとめて学習するのなら、間に「目」「口」「手」「足」などの字を挟めばよいでしょう。

一度「頭」という字がすっかり頭に入ってしまったえば、その後で「顔」の字を見せても、お子さんはその形の違いがはっきりと認識でき「あたまと読んでしまうようなことはありません。

漢字カードの上手な活用で学習効果はさらに高まる

●覚える漢字は一日一字でよい

一日に新しく覚える漢字は一字で十分です。「たった一字？」と思われるかもしれませんが、現在、小学校一年生から六年生までの間に習う漢字は合計一〇〇六字です。

三歳から、毎日一字ずつ覚えていけば、三年間で一〇〇〇字以上の漢字が覚えられますから、就学前に小学校で使うすべての教科書や小学生向けの図書も、らくらく読めるようになっていくことになるのです。そう考えると、一日一字で少なすぎると

いうようなことは決してないのです。

また、お子さんが自分から漢字に興味を示すようになれば、お母さんが作ってくれる漢字カード以外の字を見ても「これ、何て読むの？」とお子さんのほうから尋ねてくるようになりますし、はじめて見る漢字でも、その形などがら推理して教えなくても正しく読んでしまうこともあります。

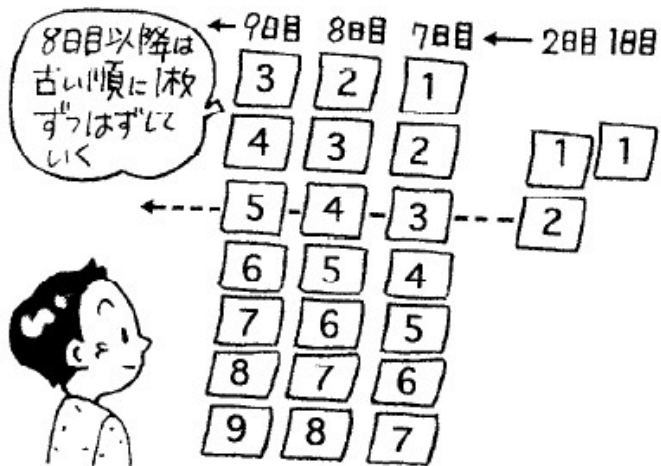
そうなれば覚える漢字の数は、ひとりで増えていくものですから、最初は決して無理をせずに、まずお子さんに「漢字が読めることの楽しさ」を教えるつもりで、一日一字からはじめてみてください。そのうえで、お子さんから「もっと、やろうよ」という声上がるようでしたら、二字、三字と多めに与えてあげてもよいでしょう。

●一週間で一字卒業が目安

前日に読んであげた漢字カードを次の日にお子さんに見せて「これ何て読むんだっけ？」と聞くと、おそらくほとんどのお子さんは正しく答えられるはずです。丸暗記が得意な幼児にとっては、そのくらい訳もないことなのです。

ただ、一度で正しく読めたからといって「ああ、もううちの子は、この字を覚えてしまった」と判断して、次から次へ新しい漢字を教えていくというのは、うまいやり方とは言えません。

幼児期の子どもは、確かに覚えるのも早いですが、せっかく覚えても使うことのない記憶に関しては、忘れることにかけてもまた天才的です。ですから、覚えた漢字を言葉としてしっかり定着させるためには、読めたから終わりではなく、何度もくり返し読むことが大切なのです。



1週間で1字卒業し1字増やす

そこで、無理なく反復して、しっかりと漢字を身につけていくためには、次のような方法をおすすめします。

まず一日目は、新しい漢字カードを一枚だけ見せ、たとえば「これは猫っていう字よ」というように、お母さんがはっきりとした声で読んであげ「じゃあ、お母さんの後に続けて読んでみてね」と、子どもにも声に出して読ませます。このとき、カードを見せる時間は、ほんの数秒で十分です。あまり長い時間をかけると、かえって集中力が散漫になり記憶に残りにくくなります。

二日目は、まず前の日のカードを見せて「これは何という字？」と聞きます。もし正しく読めたら「よく読めたね」と誉めてあげてから、「じゃあ、今日ももう一つ新しい字を覚えようか」と言って前日と同じ要領で新しいカードを見せます。

そして三日目には、はじめに前日、前々日にやった二枚のカードの読みを尋ね、読

めたら新しいカードをもう一枚というように、一枚ずつ新しいカードを増やしていくのです。

すると順調にいった場合、七日日には「これ何という字？」と質問するカード六枚、新しく覚えるカードが一枚、という状態になります。そうしたから八日目以降は、毎日いちばん古いカードを一枚ずつはずし、前日と同じく質問するカードが六枚、新しく覚えるカードが一枚という状態を続け

ていきます。つまり、新しい漢字を一日目で覚え、六日間くり返し読んだら、それで一字“卒業”となるわけです。

もし前日までにやった漢字を読めなくても、「昨日、やったばかりじゃない」「何で読めないの」などと決してお子さんを責めたり、がっかりした表情を見せないようにしてください。これは、何字覚えだからえらい、というような競争ではありませんし、何よりお母さんに叱られたために漢字嫌いになっては元も子ありません。読めない漢字があれば、いつまでも子どもに考えさせるのではなく、もう一度、はじめて見せる漢字と同じように「これは、〇〇という字よ」とやさしく教えてあげましょう。このようなときは、新しい漢字は教えなくてかまいません。

●時間を置いて反復すれば効果も倍増

漢字カードは、一日の中で何度も反復してあげると記憶にもしつかりと定着させることができます。また、幼児はもともとくり返すことが大好きですし、自分が知っていることを質問され、答えて誉めてもらえると、それ自体楽しいことなのです。

質問するカードが六枚、新しく覚えるカードが一枚となる七日目以降でも、一回の所要時間はたかだか一、二分のことですから、一日五、六回くり返すことは、お母さんにとってもそれほど負担ではないと思います。

その場合、連続して何回もやるより少し時間を置いてくり返すほうが子どもの集中力も増し、より効果的です。三度の食事の前後や就寝前など、時間を決めておくと、お子さんにもお母さんにも日常の習慣として定着して続けやすいでしょう。

親子で漢字ゲームを楽しもう

●漢字ゲームでさらに楽しく

ある程度漢字を覚えたら、一緒に漢字ゲームをして遊んでみるというでしょう。

ゲームの要素が入ることで、お子さんの漢字への興味はさらに深まりますし、家族みんなが参加すれば楽しさも倍増します。

ここで紹介しているのは、石井式漢字教育の実践園や教室で子どもたちが遊んでいる代表的なゲームですが、ルールや遊び方はお子さんの年齢などに合わせて変えていただいて差し支えありませんし、これらのゲームをヒントに、家庭でお子さんと新しいゲームを考えてみるのも楽しいと思います。

●かるたやトランプなどの遊び方を応用して

【かるた遊び】 これまでお子さんが覚えた漢字カードをテーブルや床のトに広げ、ふつうのかるたと同じように読み手が読んだカードを取っていきます。慣れてきたら、お子さんに読み手をやってもらい、お父さんやお母さんがカードを取り合う、というのもいいでしょう。

【神経衰弱】 お子さんが知っている漢字のカードを二枚ずつ作っておき、トランプの神経衰弱の要領で、同じカードを探していきます。使うカードの枚数で難易度が調節できます。また、やや上級向けのバリエーションとして「遠いー近い」「高いー低い」「大きいー小さい」などの反対語、対義語となるカードを一組ずつ作っておき、「近い」のカードを開いたら「遠い」のカードを探す、というように遊ぶ。「反対語神経衰弱」などもできます。

【カード抜き】ペアになっている漢字カードの中から一枚だけカードを抜いておき、トランプのババ抜きの要領で遊びます。

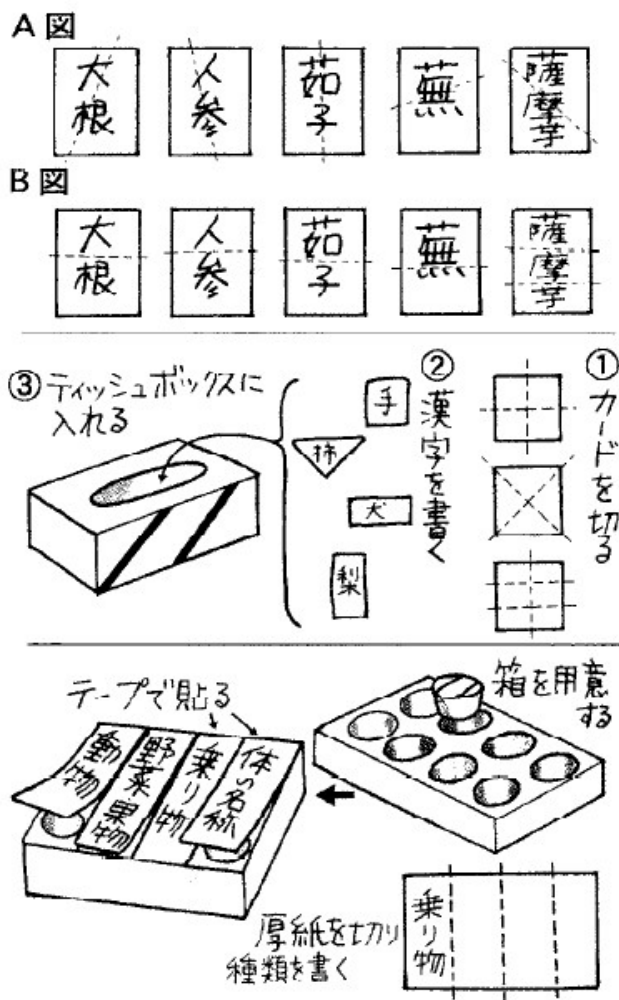
【ビンゴゲーム】先攻、後攻がお互い二租ずつ同じ漢字を書いたカードを持ち、それぞれ好きな場所に縦横三枚ずつ、計九枚のカードを並べます。先攻から順番に一枚ずつ裏返すカードを言い合い、先に縦、横、斜めのいずれかのラインが三枚裏になったらほうが勝ちです。

●魚、野菜などグループ分けした漢字で遊ぶ

【魚釣りゲーム】「鮭」さけ「鯛」たい「鮪」まぐろ「秋刀魚」さんま「鱈」あじなど、お子さんの知っている魚の名前を魚の形に切った紙に漢字で書き、クリップをつけたものを割り箸はしと輪ゴムで作った釣り竿おびで釣っていきます。

【お店屋さんゲーム】お子さんが知っている魚、野菜、果物などの名前を漢字で書いたカードをテーブルや床に表向きに並べ、たとえば「八百屋さん」といったら、順番に八百屋で売っているもののカードを一枚ずつ取っていきます。

【パズル】野菜なら野菜とテーマを決めて、「大根」「人参」なす「茄子」など、お子さんの知っている漢字をカードにし、それを缺はさまであらかじめ二つに切り誰してバラバラにしたものを、ふたたび正しく組み合わせます。切り方は、一二頁に示したA図のように切ると比較的やさしく、B図のように切るとやや難しくなります。「今日のカレーライスに入っていた材料」というようなテーマの選び方でも楽しいです。



漢字カードの上手な使い方

● 不用になつた空き箱でこんな遊びも

【漢字の泉】 一二頁の中段の図にあるように、ティッシュペーパーの空き箱に、お子さんが知っている漢字を書いた小さなカードをたくさん入れておきます。それを手探りで一枚ずつカードを引き、正しく読めたらカードがもらえます。

【漢字分類ゲーム】 贈答用のプリン、ゼリー、水羊羹ようかんなどの入っていた箱に、一二頁の下段にある図のように「動物」「野菜・果物」「乗り物」「体の名称」など分類用の蓋ふたをつけます。「漢字の泉」と併用し、引いたカードを分類ごとに入れていくと片付けにもなります。また、併用しない場合は「漢字の泉」と同じ小さなカードをテーブルなどに広げ、分類を言う役とカードを入れる役に分かれて(交代でやってもよい)、分類を言う役が「動物」と言ったら、カードを入れる役は狸や虎など、動物のカードを正しい場所に入れていきます。

● アイデア次第でこんな遊びも

【漢字探しゲーム】 新聞や雑誌の中から知っている漢字を探し、蛍光ペンで印をつけます、

【歌詞合わせ】 お子さんがよく知っている歌の歌詞を漢字かな交じり文で画用紙など、大きめの紙に書き、一行ごとに切り離してバラバラにしたものを正しく並べます。

【漢字尻取り】 三日月・月夜、空気・気球など、同じ漢字を含む言葉を書いたカード数組をテーブルの上などにバラバラに置きます。先攻がカードを一枚選んで読み、後攻は組になっているカードを見つけ、読めたら二枚とももらえます。一回ごとに先攻・後攻を交代します。

【文章作りゲーム】 名詞、動詞、形容詞、助詞などのカードを作って置き、組み合わせて文章を作っていきます。

これが漢字学習の効果的な進め方

● 「もう少し、やりたいな」というところでやめておく

実際に漢字学習をはじめてみると、次から次へと新しい漢字を覚えていくお子さんの吸収力の素晴らしさには、おそらくお母さん方も舌を巻かれることと思います。

しかし、ここで注意しなければならないのが、教える側のほうが熱中しすぎて

「この調子なら、もっと新しい漢字を覚えられるはず」

「もう一回だけくり返して、今日やった漢字は完全に読めるようにしておこう」

と、つついやりすぎてしまうことです。これは教育熱心な方ほど陥りがちな「落とし穴」と言うことができます。

ところが、これは漢字ゲームや絵本の場合も同じですが、お子さんが飽きはじめたり、疲れてきたことに気づかずに推理やりやらせてしまうと、楽しんでやっていた漢

字学習も次第に苦痛になってきてしまいます。ですから、「腹八分目」を心がけ、お子さんが「まだもう少し、やりたいな」と思っているくらいの頃合を見計らって切り上げるようにしてください。そうすれば、お子さんも「漢字って楽しいな」という気持ちをもち続けることができますし、「早くまたお母さんと漢字で遊びたいな」という意欲も自然と生まれてくるものなのです。

●教える人自身が楽しむつもりで

また「ここまでできたら、○○を買ってあげる」と、もので釣ったり、教える側の一方的な都合や気分でやったり、やらなかったりする、ゲームでいつもわざと子どもに勝たせてあげる、といったことも極力避けるようにしてください。

教える側が必要以上に子どもに媚びて漢字を押しつけようとしたり、逆に面倒臭

そうにやったりしていると、子どもは敏感にそれを察知しますから、漢字が少しも楽しくならず、自ら学ぼうという意欲や、考える力も伸びてこないのです。

まず自分自身が楽しむ——この単純な^{ひけつ}ことが、お子さんと漢字学習を進めていくうえでの、いちばんの成功の秘訣なのです。

もし「漢字で遊ぼう」と誘ってもお子さんが乗ってこないようなときは、無理じいするのではなく、お父さん（あるいはお兄ちゃん、お姉ちゃんなど）とお母さんと漢字カードを読んだり、ゲームなどをやってみるといいでしょう。みんなが楽しそうにしている姿を見れば、お子さんだって「僕も」「私も」と、きっと加わりたくなるはずですよ。

●教え込まずに子どもが自分で気づくのを待つ

最初は、どんどん新しい漢字が読めるようになる、ということを単純に楽しんでい

た子どもも、さまざまな漢字に出合っていくうちに、その字の形にも一定のルールのようなものが存在することに気づきはじめます。

もしお子さんが「蟻や蝶には、同じ“虫”っていう字がついてるね」と自分で発見したり、はじめて見る漢字を「これは“魚”っていう字がついてるから、魚の仲間かな」などと推理したりするようになったら、そのときは「すごい、よく気がついたわね」と心から誉めてあげてください。なぜなら、これはイメージをそのまま丸暗記してしまう右脳だけでなく、論理・分析によって考える左脳も成長しはじめたこと、言い換えれば、自分で考える力が育ってきた証拠だからです。

ただし、こちらのほうから「よく見てごらん、みんな“虫”っていう字がついてるでしょ」と、決して先回りして教えないようにしてください。

他から与えられた知識は記憶に残りにくいだけでなく、本当の意味での考える力

はついてきません。子どもは、自分で発見するからこそ喜びがあり、それが自ら学んでいく力にもつながっていくものですから、結果を急がずに温かい目でお子さんの成長を見守ってあげてください。

漢字かな交じり絵本が本好きの子どもを育てる

●読み聞かせは読書好きな子どもを育てる第一歩

子どもは、文字さえ読めるようになれば、本も自分から自然に読むようになるはず——そう思っている方も多いのではないでしょうか。しかし残念ながら、いくらたくさん漢字を覚え、語彙が豊富になっただとしても、それだけでは読書好きの子は育ちません。

進んで本を読もうという意欲は、二つの条件がそろって、はじめて生まれてくるもの

です。一つは言うまでもなく読字力、これは漢字力と言い換えてもいいでしょう。そして、もう一つ欠かせないのが、本を読む楽しさを実感させてあげる、ということ。私たちが大人にしても、たとえ手近に本があっても「面白そう」どんなことが書いてあるんだろう」という興味が湧かなければ、なかなか手にとって読んでみようとは思いません。それと同じことなのです。

では、まだ自分で本を読むという経験のない幼児期の子どもにも、どうやってその楽しさを教えてあげるかというと、そのいちばんの近道が絵本の読み聞かせです。

まずはお子さんが特に興味をもちそうな絵本を選んで、その情景が思い浮かぶように、表現豊かに読み聞かせをしてあげるとよいでしょう。幼児期の子どもは、興味・関心のあるものでしたら、いくらくり返しても飽きることはありません。お気に入りのお話は、最初から最後まですっきり覚えてしまっても、まだ聞きたがるものです。そんなときお母さんは、面倒がらずに何度でもくり返し読んであげてください。

「お母さん、ご本読んで」——この一言が、お子さんが本好きの子に育つための大切な第一歩なのです。

●絵本も漢字かな交じりのものを

絵本は、読書の楽しさを知る出発点となるものです。それと同時に、子どもがまだ出合ったことのないものや場所、そして鬼や妖精ようせいといった想像上の生き物をも、絵とお話によって生きいきとイメージさせることによって、語彙を豊かにし、また想像力や感受性をも伸ばしてくれるものです。

ですから、お子さんには最初からなるべく良質のものを与えてあげたいものです。ところが残念なことに、市販されている幼児用の絵本は、そのほとんどがひらがなだ



漢字かな交じりの絵本

けで書かれています。

こうしたひらがなだけの絵本を与えてしまうと、お子さんがせっかく覚えた漢字の知識が少しも生かされなければかりでなく、お母さんが読むのを聞きながら活字を目で追っているうちに、やがて、ひらがなで本を読む癖がついてしまいます。「漢字でもひらがなでも、とにかく本が読めるようになれば大したもの」と思われるかもしれませんが、実はそこには雲泥の差があります。

音とともに意味を併せもつ“見る言葉”である漢字と違い、ひらがなは音だけしか表しません。それで、ひらがなだけの絵本を与えた場合、子どもが「本を読める」といっても実際には言葉の意味がわからないまま音だけなぞって読む、いわゆる“拾い読み”をしているだけで、きちんと内容を理解していないことのほうが多いのです。

そればかりか一度ひらがなで読む習慣がつくと、漢字かな交じりの文章を読むよ

うになってからも、常に言葉をいったん頭の中で音に置き換えてから言葉の意味を理解する、という思考回路が定着してしまいうため、漢字かな交じりの本で育った子どもに比べ、読書のスピードもかなり遅くなってしまう。

このような理由から、私は、子どもには最初から漢字かな交じりの絵本を与えてあげる

べきだと考え、石井式漢字教育の実践園や教室では、私が監修したオリジナルの漢字の絵本を教材として使っています。家庭で漢字学習を進めていくうえでも、こうした絵本を上手に活用してみるのもよいでしょう。

もちろん、漢字学習にはこの絵本が不可欠ということではありません。市販の幼児用絵本でも、漢字表記にしたほうが自然な箇所には正しい漢字を書いた紙を貼ってあげればよいのです。たとえば「むかしむかしあるところに おじいさんとおばあさんが すんでいました」という冒頭の一節であれば、「昔々 ある所に お爺さんとお婆さんが 住んでいました」という具合に直し、手製の漢字かな交じりの絵本を作ってしまうわけです。

●キーワードとなる漢字をカードにしてみる

絵本の読み聞かせにより、本を読む楽しさを教えてあげることが、読書が好きになることの第一歩であることはすでにお話ししましたが、これに加え、絵本の中のキーワードとなる漢字をカードにし、読み聞かせとは別に、ふつうの漢字カードの要領でくり返し読むようにすると、お子さんが自分で本を読むためのステップになります。

キーワードとなる漢字とは、登場する主要な人物や動物の名前、舞台となっている場所、お話を理解するうえで重要な物の名前などのこと。「この絵本では絶対にこの漢字を」というような決まり事があるわけではありませんし、お子さんがはじめて見る漢字を全部カードにする必要もありませんので、あまり考えすぎずに、

・くり返しくり返し出てくる言葉

・お子さんの興味・関心をひく言葉

・文章の冒頭に出てくる言葉
といった基準で選んでみてください。

なぜ文章の冒頭に出てくる漢字もキーワードに加えるのか、不思議に思われるかもしれませんが、その種明かしは次の項ですることにしましょう。

●文字を目で追えれば、自然と音読ができる

同じ絵本を何度となく読み聞かせてあげていると、そのうちに子どもはお話をすっかり覚えてしまい、お母さんが読み間違えたり、勝手に端折ったりしようものなら、「そこはそうじゃないよ」などと指摘したりします。しかし、これは言うなれば丸暗記で、本が読める」という状態とは明らかに異なります。

では、どうしたら丸暗記から徐々に「本が読める」状態へと移行していけるのでしょうか。第一のステップとして、キーワードとなる漢字をカードにすることを挙げました。それらの漢字がしっかり頭に入っていると、子どもは絵本の中にとどこどこ自分で読める字を見つけることができます。そこで第二のステップでは、その知っている漢字を頼りに、お母さんが読んでいる絵本のページをお子さんにめくってもらうのです。

そして、正しくページをめくれるようになったら、今度はお母さんが読むのに合わせて、文字を一字一字指でなぞっていきます。すると、最初は知っている漢字を追っていくのが精一杯でも、何度もくり返しているうちに次第にその途中にある言葉にも目が行くようになってきます。また、途中で読んでいる箇所を見失っても、文章の冒頭に知っている漢字があれば、それを手がかりにふたたび行の最初から指で追っていくことができます。文章の冒頭の漢字をキーワードに加えておくのは、そのためなのです。

一字一字が正しく指せるようになれば、お子さんはもう十分「本を読める状態」と

言うてもいいでしょう。

ただ、そこまでもっていくには、何度も何度も反復することが必要ですから、決して焦らないことです。お子さんが正しくページをめくれなかったり、なぞる文字を見失っても決して責めずに、「じゃあ、次はここから読もうね」とやさしくフォローしてあげてください。うまくできたときは、「よくできたね」「すごいね」と、精一杯誉めてあげましょう。

ただし、一字一字正しく指せるようになったからといって、急に読み聞かせをやめてしまったり、音読を強要するのはよくありません。「読書は楽しいもの」と感じる感じがいちばん大切ですから、「自分もお母さんの真似をして読んでみたい」という気持ちがお子さんに自然に芽生えるまで、読み聞かせをしてあげればよいのです。

そして、もしお子さんが「ねえ、聞いて」と言ってきたら、そのときは、どんなに忙しいくても、熱心に耳を傾けてあげてください。すらすら読めるようになるまでには、さらに何度となくくり返すことが必要ですが、ひとりで本が読めるようになったという達成感はお子さんにとって大きな自信にもつながります。

古典の美しい言葉で子どもの感性が育つ

●言葉をいちばん吸収する時期に最高の言葉を

〇く九歳にかけては、大脳の仕組みがほぼ完成される時期であり、一生涯を通じて、いちばん言葉を吸収する時期でもあります。ですから、この時期のお子さんに与える言葉は、量のみならず“質”にもこだわりたいものです。

そこで、おすすめしたいのが、詩や俳句、古文、漢詩、『百人一首』、『論語』など、いわゆる古典と呼ばれるものの音読です。

「大人にとっても難しい古典を幼児になんて……」と思われる方も多いかもしれませんが、これがたとえば音楽だったらどうでしょう。ピアノを習いはじめたばかりのお子さんに対して「モーツァルトやバッハはまだ難しすぎるから」と耳に入らないように遠ざけてしまうようなことはしません。お子さん自身が弾くには早い難曲であっても、いい音楽であればどんどん聴かせてあげることが、音感を養い感性を豊かにしていくのです。

言葉もこれとまったく同じです。長い年月を経て、なお語り継がれてきた古典には、美しい言葉や音の響き、リズムが満ちています。ですから、意味がわからなくても音読をくり返しているうちに、その豊かな言葉が頭の中に蓄積され、知らず知らずのうちに素晴らしい語感が磨かれていくのです。その点では、古典の音読は、ちょうど音楽のクラシック鑑賞に当たるもの、と言うことができます。

また、幼児期に古典を通じて、文語文に触れておくことは、中学校から本格的にはじまる古文の学習にも大いに役立ってくれます。もちろん、幼児期にすらすら暗誦していたものでも、時間がたてば忘れてしまいます。

それでもよいのです。「再学習の効果」といって、人間の脳は、何かをまったくはじめて学ぶ場合に比べ、以前にやったことをもう一度学ぶ場合のほうが、はるかに効率よく習得できるような仕組みになっています。

ですから、幼児期に古典を読んだ経験があれば、中学の教科書で古文にまた出会ったとき、外国語のような違和感を覚えることもなく、親しみを感じながら読み進むことができます。

●まずは、^{ことわざ}諺や俳句、『百人一首』から

いくら音読だけでよいとはいえ、古典となると若いお母さん方にとっては、敷居が高く感じられるかもしれません。ところが、古典といっても決して堅苦しく考える必要はなく、最初はお母さん方にも身近な題材から、遊びの延長としてはじめればよいのです。

そうした面から、入門編としておすすめののが、諺です。「頭隠して尻隠さず」「犬も歩けば棒にあたる」「鬼に金棒」「猿も木から落ちる」といったように、江戸時代から伝わるお馴染みの諺には独特のリズムがあり、意味を知らなくても具体的なイメージが思い浮かぶ平易でユーモラスな表現は、子どもにとってもとても楽しいものなのです。

また、俳句や『百人一首』の七五調のリズムも、幼児にはたいへん覚えやすいものです。俳句や和歌の、限られた字数の中に凝縮された美しい表現は語感を磨くものにもとても役立ちますし、文語表現に無理なく親しんでいくのにも適しています。

音読のやり方としては、画用紙などに漢字かな交じりで書いてあげたもの、あるいは石井式の漢字かるた(二九頁参照)などを使い、漢字カード同様、まず読んであげて続けてお子さんがくり返す、という方法をとるとよいでしょう。

そして、たとえば一週間で七枚のカードが読めるようになったら、その七枚を使ってかるた遊びをする、というような形に発展させていくと、お子さんの興味もますます深まります。

●人生の指針ともなる『論語』

石井式漢字教育の教室や多くの実践園では、子どもたちが先生の後に続いて『論

語』の一節を音読する光景を目にすることができます。

『論語』とは、ご存じのように儒教の祖、孔子とその弟子たちとの問答を集めた書ですが、なぜ、わざわざ幼児期の子どもに大人でもめったにひもと紐解くことのない『論語』などを与えているのでしょうか。

それは、『論語』の中には、すでにお話ししたような古典独特の豊かな言葉の響きやリズムがあることに加え、一つの思想という範疇を超えた、人生の真理や生きていくうえでの指針となる言葉が豊富に散りばめられているからです。

たとえば「温古而知新(故きを温めて新しきを知る)」「過猶不及(過ぎたるはなお及ばざるがごとし)」などは、今なお、諺同様に、私たちの生活の中に根付いている人生の知恵とすることができまますし、「見義不為、無勇也(義を見てせざるは勇なきなり)」「己所不欲、勿施於人(己の欲せざる所、人に施すことなかれ)」「過則勿憚改(過ちて

は則ち改むるに憚ることなかれ)」といった言葉は時代を超えた普遍的真理と言ってもいいでしょう。

もちろん子どもたちには、まだ言葉の意味を深く理解することはできませんし、先生も「どういう意味？」と聞かれない限り、解説を加えることはありません。子どもたちは、言葉の意味よりも、もっぱら下の字を先に読んだかと思うとまた上へ、という漢文独特の読み方やリズムに惹きつけられて面白がって読むのです。

ところが、そのように今はただ楽しくくり返し読んでいるだけでも、成長していく中で「ああ、あれはこういうことを言っていたんだな」と、その意味を自分なりに感じ取ることができるようになるのです。

それは最初から「これはこういう意味の言葉なんだよ」と教えられるよりはるかに価値のあることであり、そこで得られた理解は子どもたちが生きていくうえでも大

きな財産になるのではないかと思っています。

文字の成り立ちを知ると漢字はもっと楽しくなる

●物事を絵や図のように表した象形文字と指事文字

すでに述べたように、最初は丸暗記でどんどん漢字を覚えていた幼児も、五歳くらいになって理屈で物事を考える左脳が発達しはじめると、蟻や蝉せみなど虫の仲間には“虫”、鳩や鶏など鳥の仲間には“鳥”という共通の字がついていることに自然と目が行くようになります。

また「じゃあ、どうして“雀”や“雉”には“鳥”の字がついていないの？」とか、“黒”や“燃”の字の下についている点々には、どんな意味があるの？」など、漢字に対してさまざまな疑問や興味を抱くようになります。

お子さんがそうした時期にさしかかったら、少しずつ漢字の成り立ち、すなわち、その漢字がどのようにしてできたのかを、漢字辞典などを使って親子で一緒に調べてみるとういでしょう。“山”や“川”という漢字が、実物の山や川の形をかたどって作られたいわゆる象形文字であることはよく知られていますが、それ以外に、顔の部分の名称「目、口、耳」や「牛、馬、鳥、魚、虫」などの動物、そして「日、月、木、火、水、雨、門、田」などの漢字もすべて象形文字です。

こうした幼児にとっても身近な漢字が、もともとは実物を絵で表したものだとうわかれると、それだけでワクワクするような楽しさがありますし、成り立ちを知ることで、一つひとつの漢字の意味がより生きいきとイメージでできるようなるのです。

また、この象形文字とよく似たものに、指事文字と呼ばれるものがあります。数字の一、二、三……「や」「上、下、本、末」などがこれにあたり、象形文字が形のあるもの

を絵のように表しているのに対し、指事文字は目に見えないもの、形のないものを図や記号のように表現しています。

漢字の意味からするとやや抽象的になりますが、象形文字と同じように視覚的なイメージで捉えることができるので、幼児にも十分理解できるはずです。

●二つ以上の漢字の意味を組み合わせてできた会意文字

こうした単独の象形文字や指事文字の成り立ちが少しずつわかってくると、それらが他の漢字の一部(部首)として、さまざまな形で組み合わせられて使われていることも、これまで以上に意識するようになってきます。

すると今度は、象形文字や指事文字を二つ以上組み合わせてできた漢字について、その成り立ちを調べてみます。

複数の文字を組み合わせてできた漢字には、それぞれの文字の意味を組み合わせ、別の言葉を表す会意文字と、^{へん}扁が意味を表し、^{つくり}旁が発音を表すというように、意味と発音を組み合わせた形声文字がありますが、このうち、幼児にもわかりやすい会意文字のほうを中心に、漢字の成り立ちを見ていくといいでしょう。

たとえば、田んぼで力仕事をする人という意味で“田”と“力”を組み合わせる“男”、人は休憩するときには木陰を選ぶことから“人”と“木”を組み合わせる“休む”、“鳥”と“口”で“鳴く”、“日”と“月”で“明るい”、重いものでも力を出せば動くことから“重いと“力”で“動く”、さらにこの“動く”に“人”を組み合わせる“働く”……、このように一見複雑そうに見える漢字の成り立ちにも、きちんとそれなりの理屈や法則性があることがわかってくると、漢字がますます面白くなってきますし、言葉の意味もよりはつきりと理解できて忘れることがないのです。



部首の意味がわかると理解が深まる

● 部首に強くなると、漢字はさらに面白くなる

すべての漢字は、基本的に象形文字と指事文字、そしてそれらを扁、旁、脚、繞、垂、構といった部首として組み合わせた会意文字と形声文字からできています。ところが、象形文字や指事文字が部首として使われる際には、“木(木扁)”や“魚(魚扁)”などの

ように元の形がすぐわかるものばかりではなく、水の意味で使われる“氵(三水)”が水を表しているというように、一部が省略、変形されたり、あるいは部首だけにしか使われない特殊な形をしている場合も多いものです。

そこで、お子さんが部首に関しても「これは、どういう意味？」「何でこういう形をしているの？」というような興味を示すようになったら、析に触れ、部首のもつ意味についても調べてみるとういでしょう。

たとえば“隹”^{ぶるとり}という部首が“鳥”と同じように鳥の形を表した象形文字であることがわかると、“雀”や“雉”に“鳥”の代わりに“隹”がついている理由もよくわかります。また、“胸”“腰”“脚”など、体の部分の名称になぜ“月”の字がついているのかは、文字を見ただけではわかりにくいものですが、“この‘月’はお月様の月ではなく、食へるお肉に細かいスジが入っているところを表した‘肉’の字を表しているの。だから‘肉月’^{にくつき}”と言

て、体の一部を表す言葉によく使われるの」と説明すれば、子どもでも納得がいくのです。

さらに、人や手といった意味を表す部首は、よく知られた「イ（人偏）」や「扌（手偏）」以外にも、たくさんのバリエーションがあります。たとえば「尸」「儿」「匕」といった部首もすべて人を表すものです。

ですから「見」という字は、人は目でものを見るという意味から「目」と「人」を組み合わせたものですし、並ぶ、比べるの意味で使われる「比」は二人の人間が並んだ姿を表したものです。

一方、「ナ」「又」「ヨ」「冫」などはすべて手を意味する部首で「友」という字は、手を二つ組み合わせて仲のよい友達、「雪」は手のひらにのるようになった雨、「右」は食へ物を口に運ぶ手、「左」は定規（工）を持つ手、という意味を表しています。

このように、部首の意味までわかってくると漢字や言葉への理解はさらに深まり、知らない漢字に出合っても、その部首を手がかりに、まず意味や読み方を自分で考えてみようという意欲が自然に身についてきます。

また、こうした漢字の基本的な構造が、おぼろげながらも頭に入っていると、小中学生になつて丸暗記能力が低下してきても、部首から論理的、体系的に漢字を理解することができるので、漢字の学習で苦勞したり漢字嫌いになることはまずないのです。

なお、こうした漢字の成り立ちの学習には、小学校六年間で学ぶ漢字一〇〇六字の成り立ちをすべてわかりやすく解説した『楽しい漢字教室』（石井勲著ぎょうせい刊）などを活用していただくといいでしょう。

オリジナルの教材や教室を活用する方法も

●楽しく遊びながら豊かな心を育てる石井式オリジナル教材

漢字遊びのバリエーションをもっと広げてあげたい」「忙しくて、なかなかお子さんのために漢字カードなどを作ってあげる時間がない」「あるいは「どんな漢字をカードにし、どんな絵本を読んであげたらいいのか自信がない」というような場合は、石井式漢字教育の理念に基づいて作られた各種のオリジナル教材を活用していただくのもいいでしょう。

石井式漢字教育を実践する全国の幼稚園、保育園、そして教室でも使われている主な教材には次のようなものがあります。

【漢字カード】

『楽しく遊ぶ漢字カード』（石井勲監修）は、幼児が日常話す言葉の中から、もっとも

も使用頻度の高い言葉を三〇〇選び、カードにしたものです。体の部位や動植物の名前、家族、乗り物、食へ物、身のまわりの道具や街の施設など、さまざまな名詞に加え、「大きい」「熱い」「食へる」「行く」といった基本的な形容詞や動詞も収録されていて、漢字の習得はもちろん、送りがなでひらがなの読みも自然と身につきます。

かるた取りや、動物、乗り物など、同類のカードを選んでいく仲間集め、「長い―短い」など対になる言葉を探す反対語ゲームなど、アイデア次第でさまざまな遊び方もできます（「漢字カードの使い方、遊び方」と適宜必要な漢字が書き込める無地カード「二四枚付き」）。

【漢字の絵本】

『石井方式青い鳥文庫』は年少向けの「赤い実シリーズ」、年中向けの「白い実シリーズ」、年長向けの「青い実シリーズ」と、それぞれ全一〇巻ずつのシリーズになっていて、



便利な教材セットを利用する方法も

漢字かな交じり文と美しい挿絵からなる幼児向けの絵本です。

イソップ童話や日本の昔話、空想や冒険の物語など、子どももの興味や好奇心を掻き立てる、楽しくバラエティー豊かな題材を取り上げています。

漢字かな交じりとはいっても、そのいわば入門編である年少向けのシリーズでは、文字量は見開きに一行から数行程度。子どもたちが負

担を感じることなく、本を読む楽しさを知り、また、巻が進むにつれ、少しずつ無理なく高度な内容が読みこなせるよう配慮されています。

【漢字かるた】

私たち日本人が古くから受け継いできた俳句、諺、童謡、『百人一首』といったものは、美しい言葉や楽しいリズムに満ちています。漢字かるたは、遊びの中で、そうした日本の伝統・文化に自然と親しみながら、お子さんの豊かな感性を育んでくれます。かるた取りは子どもたちの大好きな遊びですので、お母さんだけでなく、お父さんや兄弟も交えて、家族全員で楽しむのもよいでしょう。

『諺漢字かるた』……江戸庶民の生活から生まれ、生きた智慧として語り継がれてきたのが諺です。その中から「石の上にも三年」「猿も木から落ちる」など、子どもたちにも親しみやすい五十句を集めています。

『俳句漢字かるた』……主として三大俳人といわれる小林一茶、松尾芭蕉、与謝蕪村の句の中から、特に幼児が興味をもちそうなもの、誰もが知っている有名なもの五句を選んであります。

『小倉百人一首』……藤原定家が撰じた歌仙秀歌集『小倉百人一首』は、誰もが一度は触れる日本のすぐれた古典の一つです。恋歌が多いこともあって、流麗な言葉の響きを楽しむことができます。漢字学習の効果を高めるため、読み札、取り札ともに漢字かな交じり表記になっているオリジナル版です。

その他、漢字絵本の延長線上に位置する教材として、美しい言葉を味わいながら、子どもとの語感を磨く古典や名作を集めた『国語読本』『朗誦撰』『日本朗誦文学撰』『論語撰集』『唐詩・五言絶句』なども用意されています。

●楽しみながら国語力が育つ「石井式能力開発教室」

現在、石井式漢字教育は全国約七〇〇の幼稚園、保育園で実践されている他、「石井式能力開発教室」では「本好きの子を育てる」をモットーにして、一歳六ヵ月から小学一年生までのお子さんを対象に、漢字絵本をはじめとするオリジナル教材を使い、週一回の授業を通して、楽しみながら国語力の基礎を育成しています。

また、石井式能力開発教室」では教室に通うのが難しいご家庭のための通信指導のコース（〇〜九歳対象）を開設しており、従来の教材に加えてビデオや担当講師による電話指導などを取り入れることで、はじめて石井式漢字教育を体験されるお母さんとお子さんでも、楽しく漢字学習を進められるようになっていきます。「お子さんに、ぜひ本格的な漢字教育を」とお考えのお母さんは、こうした教室を利用していただくのもいいでしょう。

《教材、教室に関する問い合わせ先》

石井式国語教育研究会

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南2-18-6-103

TEL 03-3760-3420 FAX 03-3760-3422

(その後移転を繰返し、住所や電話番号は変わっています。)